

## 女性学をめぐる諸問題 (2)

『家族、私有財産および国家の起源』を読む  
家父長制家族の起源と女性の世界史的敗北

山 田 隆 夫

### 家族 (The Family)

『血縁婚家族』(consanguine) とは、モーガンの用語である。家族の社会制度の最初の段階にたいして用いる語である。この段階において、両親と子供たちだけが婚姻のパートナーとして禁止されていた。兄弟姉妹、男性と女性のいところは相互に夫と妻になる潜在的可能性をもっている。今日、かかる段階の存在の直接的な証拠は存在しない。しかし、つぎの事実から、モーガンは推測したのである。すなわち、存在しているイロクオイ人の用いる親族の概念はかれらの間に存在している広まった実際の親族を記述していないのである。このことはつぎのことを示していた。ひろまっている用語は初期の婚姻のパターンの名残りであったということである。そして実際に、モーガンは確信していた。ハワイならびにポリネシア群島にあった最初のパターンを見出したのだと。

次の段階を、モーガンは、『プナルア婚家族』(punaluan family) と呼んでいた。この婚姻は、両親と子供だけでなく、兄弟姉妹もまた、性交関係から排除されていた。この段階もまた、推測しえるものであった。これもまた、モーガンが推測したものであって、ハワイの親族の用語は、一つの慣習を指摘するものであって、この慣習では、ある数の肉身のまたは遠縁の姉妹たちが彼女たちの共同の夫たちの共同の妻たちとなっていたが、彼女たちの兄弟たちはそれから除外されていた。いまでは、これらの夫たちはもはや兄弟とよびあわなかったし、それにもう兄弟である必要もなかった。

た。そのかわりに、彼らはプナルア (punalua) とよびあっていた。〔これを彼らは血縁婚の段階ではそう呼びあっていたのだが〕。これは親しい同僚ということで、いわば組合仲間 (companion) ということである。同じことだが、共同の妻たちもプナルアとよびあっていた。これは、ある種の集団婚 (group marriage) の形態をあらわしている。南オーストラリアのアボリジン (一例であるが)、は大きな族外婚のカテゴリー、又は『分族 (moieties)』に分裂して組織されていた。一つの『分族 (moiety)』の内部では、性交はきびしく禁止されていた。他方では、一つの分族内のあらゆる男性は他の分族内のあらゆる女性の生れながらの夫であり、そして、彼女は生れながらの妻であった。このことは、一つの集団の男が他の集団の女との性関係を持ちうることを必ずしも意味するものではない。モーガンもエンゲルスも性的乱婚の最初の時期の可能性——そこから「プナルア」形態が発生してきたという可能性を考えたにしても、現実の歴史のなかでの事態をあらわす証拠を見出したわけではなかった。それどころか、両人は、いわゆるグループ婚の段階で、いやもっと初期に一定の常習的な「対偶 (pairing)」婚が存在していたことを強調する。男性は主要な妻をもち、彼女にはその男性は主要な夫であった。——ここから、次の段階、すなわちモーガンが、『対偶婚家族』と呼ぶ段階が発生したのである。しかし、この初期の対偶婚家族は、それ自身の世帯を形成するには、あまりにも弱く、不安定であった。それは古代から受けつがれてきた共産主義的世帯のなかに記憶にはめこまれたまま残ってきたものである。

モーガンに従って、エンゲルスは、このような共産主義的文脈における婦人の地位と役割に関するテーゼを発展させることになる。

「女たちの大部分あるいは全部が同じ一つの氏族に属するのに、男たちのほうはさまざまな氏族に分れている共産主義的世帯こそ、原始時代にあまねくひろまったていたあの女の優越の物質的基礎である」。(② 54 頁)

「対偶婚家族は、それ自体あまりに薄弱で不安定なため、独自の世帯を必要にしたり、でないまでも、願わしいものにすることさえないので、まえの時代から受けつがれた共産主義的世帯を解体させることはけっしてな

い。ところが共産主義的世帯は家内で女が支配することを意味するのであって、そのことは肉身の父を確かに知ることができないのに、肉身の母だけが確認されるということが、女すなわち母にたいする高い尊敬を意味するのと同じである。」(㉑ 53 頁)

婦人の権威と尊敬された地位はモーガンやセネカイロクオイ族のあいだに派遣された宣教師アシャー・ライトによって証言されていた。一つの氏族の婦人は他の氏族から夫をむかえる。そして、数家族を形成し、「ログ・ハウス」に世帯をもつ。

ライトは次のように観察している。

「ふつう、女の方が家を支配した。……貯蔵品は共有であった。しかし、あまりにのろのろしているためか不器用のためかで共同の貯蔵に自分の分担をもたらしことのできない不運な夫または情人は、あわれだった。どんな多くの子供をもとうとも、また家のなかに多くの私物をもっていようと、それにはおかまいなく、いつなんどきでも、荷物をまとめてとっとと出てゆけと命令されるのを、覚悟していなければならなかった。そして、それにさからおうとしても、だめだった。家にいたたまれないようにされたからである。だから、彼は自分のクラン（氏族）にもどるか、それとも、たいていはそうするのだが、どこかほかのクラン（氏族）に新しい婿入り口をさがすほかはなかった。女はクラン（氏族）内でもその他のどこでも、大きな勢力であった。ときには彼女たちは、酋長をやめさせて、並の戦士におとすことさえ、ためらわなかった」。(㉑ 54 頁)

いまや、全く重要な問題が発生する。「野蛮」の時代まで、婦人たちは名誉と尊敬される高い地位を持っていたのに、何故に「文明」の幕開けとともにそれを彼女らは失ってしまったかという問題である。新大陸は、この段階をすぎさっていないから、これに対する答を与えることはできない。それゆえ、エンゲルスは、その回答を与えてくれるであろう事件の鎖を再構成するために東洋にやってくるのである。

「野蛮」の一定の段階までは、共同体の富は、家屋、衣服、粗末な装飾品、

そして食料を獲得し調理するための道具、すなわち、舟、武器、最も簡単な種類の什器に限られていた。食糧は毎日新たに獲得しなければならなかった。しかし、馬、ラクダ、ロバ、羊、牛、豚の畜群という形で、見張りのごく大ざっぱな世話さえすればますます大量に繁殖し、乳肉食料をきわめて豊富に供給する「財産を、前進していく遊牧諸民属は、獲得したのである。」エンゲルスは尋ねた。「しかしこの新しい富は誰のものだったのか？」(㉑ 50 頁)

エンゲルスは推測する。「疑いもなくはじめは氏族全体のものだった」(㉑ 51 頁) しかしながら、われわれの最初の歴史資料はつぎのことをあきらかにしている。「畜群の私的所有は、すでにはやくから最古の文明に発展していたにちがいない。」「どうしてこのことが発生したのか」(㉑ 51 頁) 対偶婚家族内の性的分業によれば、食糧を獲得し、そのために必要な労働の要具を生産するのは夫の責任であった。

「従って、労働手段の所有権も夫にあった。そして離婚の場合には、夫はこの労働手段を持ちさり、妻は彼女の什器を保有した。だから、時の社会のならわしに従えば、夫はまた新しい食糧源である家畜の所有者であり、のちには新しい労働手段である奴隷の所有者であった。しかし、同じ社会のならわしに従えば、彼の子供たちは彼の財産を相続することはできなかった。」(㉑ 61 頁)

何故相続できないのか?なぜなら、族外婚や母権制の相続のルールのもとでは、夫は家畜群や他の物品を彼の氏族の兄弟姉妹そして、その子供らに贈与しなければならないしくみになっていたからである。しかし、彼自身の子供たちは他氏族の婦人の子孫(出自)であったから、彼自身の生物学的な意味での子供たちは、彼の財産を相続することはできなかった。さて、富が増大してくるにつれて、また、富を生みだす点での彼の役割が増大してくるに、これは、相続の古い伝統的な秩序を変革しようという彼の決意を強めるのである。しかし、母権制による出自がおこなわれているかぎり、それはできない相談であった。だからこの母権制はくつがえされなくてはならなかった。そしてそれはくつがえされた。この革命は平和

的な革命であって、つぎの簡単な布告によってもたらされるものであった。今後は男の氏族員の子孫が氏族にとどまり、女の氏族員の子孫は締めだされてその父の氏族に移るものとなるという簡単な決議でよかったのである。「これによって女系による出自算定と母方の相続権とがくつがえされ、男系による血統と父方の相続権とが打ち立てられた。」(㉑ 61 頁) このことは、つまり母権制の転覆は「女性の世界史的な敗北」であった(㉑ 62 頁)。この権力の決定的な移行の古典的な実例は、ローマの家父長制家族(the Roman pater familias)であった。そこでは、男性の世帯の長が、すくなくとも理論的には、生殺与奪のコントロールを、彼の妻、子供達、そして奴隷にふるっていた。しかし、家父長家族は、古代の近東の最古の歴史の記録にすでにその証拠がある。

### 一夫一婦婚家族 (The Monogamous Family)

一夫一婦婚家族が発生するのは、対偶婚家族、そして経済にはたす男性の役割の増大する重要性からである。それは、だれが父親かについて議論の余地のない子どもたちを生ませるというはっきりした目的で、男の支配のうえにきずかれている。そして、そういう父の確実性が要求されるのは、これらの子どもがやがて肉親の相続人として父の財産を相続することになるからである。一夫一婦婚のもとでの妻の選択における純潔と個人的性愛の要素があろうとも、エンゲルスにとっては、制度としての一夫一婦婚家族は、原始的、共産主義的財産制度にたいする私有財産の勝利に由来した。

エンゲルスは提唱する。資本主義のもとでは、一夫一婦婚家族は、しばしば、打算婚として発生する。有産者階級のあいだで、とくにそうであり、目立っている。このような環境のもとでは、婚姻は、当人たちの側の階級的地位によって条件づけられているが、しばしば売春の形に転化する。——これは、ときには夫婦の双方について言えることだが、妻の場合のほうがずっと普通である。このような妻が普通の娼婦と違う点は、賃金労働者として一日いくらかで自分の肉体を賃貸するのではなく、それを終身の奴隷として売りわたしてしまう点である。ブルジョワの婚姻では、一方の側と他方の側との個人と個人に関係する家族を結びつける背後にある主要な

動機は、彼らの経済的立場を高めることである。原則として、富と財産についての関心が目立った動機になるが、真の愛情は例外になる。そこから、男と女の間の——本物の愛情関係は、プロレタリアートの内部でだけ原則になるとエンゲルスは言っている。このプロレタリアートには、財産というものはなにもないが、一夫一婦婚と男の支配とがつくりだされたのは、まさにこの財産を保存し相続させるためにほかならなかった。(21 76 頁) エンゲルスははっきり認めている。「ここには男の支配権を行使する動機はなにも一つないのである。」(21 76 頁) さらに、エンゲルスは論ずる。「おまけに、大工業が女を家庭から引きだして労働市場へ、そして工場へと引きいれ、また女が家族の養い手となることもめずらしくなくなってからは、プロレタリアートの住居では、男の支配の最後の名ごりからいっさいの基盤が失われた——一夫一婦婚の採用以来根をはった、女にたいする暴虐の一片がまだ残ってでもないかぎり——。」(21 76 頁)

エンゲルスはさらに観察をすすめる。「家父長制家族が現われるとともに、またそれにもまして一夫一婦婚が現われるとともに、家政の処理は、その公的性格を失った。それはもはや社会とはなんのかかわりあいも持たないものになった。一つの私的奉仕になった。妻は、社会的生産への参加から追いのけられて女中頭となった。」(21 78 頁)

エンゲルスは書いている。

「現代の大工業がはじめて女に——それもただプロレタリアの女だけに——、社会的生産への道をふたたびひらいた。だがその仕方は、女が家庭での私的奉仕の義務を果せば、ひきつづき公的生産から締めだされたままになって一文も稼ぐことができず、また公的産業に参加してひとりだちで稼ごうと思えば、家庭の義務を果すことができない、というようなものである。そして、女は、工場でこうであるばかりか、医師や弁護士にいたるまでのいっさいの職業部門で同じ状態である。」(21 78 頁)

「今日では、大多数の場合に、すくなくとも有産階級においては、夫が稼ぎ手、家族の養い手でなければならない、そのことが夫に支配者の地位を与えるのであって、そのためには、法律上の特殊な特権は必要ではない。夫

は家族のなかでブルジョアであり、妻はプロレタリアートを代表する。」  
（㊦ 78 頁）

エンゲルスは、どのように婦人のこのジレンマの解決を展望したのである  
ろうか。このジレンマは、彼女の家族に対してと、大社会に対してとの  
サーヴィスが矛盾しているからだ。エンゲルスは社会主義者であったか  
ら、生産手段の共同所有への転換にその解決を展望する。

「生産手段が共同所有に移るとともに、個別家族は社会の経済的単位で  
なくなる。私的な家政は社会的産業に転化する。子どもを養い育てるこ  
とは公務となる。……社会はすべての子どものために一様に心をくばる。」  
（㊦ 80 頁）

かかる社会的システムにおいてのみ、真の愛情、婚姻相手の選択の自由  
が一般に確立されるのである。「だから、婚姻締結の完全な自由は、資本主  
義的生産とそれによって作りだされた所有関係とが廃止され、その結  
果、いまなを配偶者の選択にきわめて強い影響をおよぼしている副次的な  
経済的考慮がすべて取りのぞかれたときに、はじめてあまねく実行できる  
のである。」（㊦ 85 頁）

社会主義のもとでのみ、「そのときには、まさに相互の愛着のほかには、  
もはやどんな動機も残らない。」（㊦ 85 頁）エンゲルスは尋ねている。男女  
をめぐる関係は、新社会ではどのようにあらわれるのであろうかについて  
われわれが今日予測できるのはどんなことであらうかと。

エンゲルスは書いている。「新しい世代が、すなわち、その生涯に金やそ  
の他の社会的権力手段によって女の肉体提供を買いとる場合に一度も出  
あったことのない男たちと、真の愛以外のなにかの考慮から男に身をまか  
せたり、また経済的結果を恐れて愛人に身をまかせるのを拒んだりした場  
合に一度も出あったことのない女たちの世代が成長してきたときに、決定  
されるであろう。こういう人々がいよいよやってきたときには、彼らは彼

らのなすべきことについて今日の人間がどう考えているかということなど、まったく意に介しないであろう。彼らは彼ら自身のやり方を、またそれにおうじて測られた、各人のやりかたについての彼らの世論を、自分でつくりだすであろう。——それでおしまいである。」(2180 頁)